

2016年5月13日

中国・ベトナムの漢文文献の中の南シナ海方面の記述について 補遺 13

嶋尾稔（慶應義塾大学言語文化研究所）

1. まず『慶應義塾言語文化研究所紀要』46に掲載した「七洲洋に関する覚書」の補足である。

清朝末期、1909年（宣統元年）に広東総督の張人駿が籌辦處を設けてパラセル諸島の調査を行ったことは周知のとおりであるが、同年、広東参謀處が『廣東輿地全圖』を刊行している（中国方志叢書第108号『廣東省 廣東輿地全圖（全）』〔成文出版社、民國56年〕、東洋文庫所蔵）。「広東全省経緯度図」を冒頭に置き、以下、府・州・県の図が示されている。

このなかで、「広東全省経緯度図」、「瓊州府図」、「文昌県図」に七洲洋が描かれている。七洲洋の位置は、七洲列島の近海である。七洲洋の位置を明確に示した最初の近代的な地図である。

また、同じく1909年に広東参謀處は、光緒15年（1889）刊『廣東輿地圖説』を復刻している（中国方志叢書第107号『廣東省 廣東輿地圖説（全）』〔成文出版社、民國56年〕、東洋文庫所蔵）。この本の巻首録例（4b）に次のように記されている。

粵省地勢、東西袤長、南北稍狭、然前襟大海、其中島嶼多属檢要、故水師每歲例有巡洋、東自南灣之東南南澎島、西迄防城外海之大洲・小洲・老鼠山・九頭山〔九頭山亦作狗頭山、與越南接界、素為洋盜淵藪、同治間粵督瑞麟照會越南國會勦、據覆下國広安海分原無九頭山名号、已派船往白藤江按截等語、白藤江口以外皆粵界、故光緒十二年（1886）勘界、前督張之洞呈図証其一二三綫皆包九頭山在內、後止辨論、陸界於海界尚無明文、似宜亟為画定、俾巡洋者有所遵守〕、皆粵境也。今之海界以瓊南為断、其外即為七洲洋、粵之巡師、自此還矣。

この記述より、清末に広東海軍が沿岸巡視を実施していたこと、この当時の海域の南限は「瓊南」すなわち海南島の南であったこと、沿岸巡視船が海南島の外海である七洲洋すなわち七洲島近海までを管轄範囲としていたことが知られる。

他方、翌1910年に『東方雜誌』第7巻第6期に掲載されたドイツ人のパラセル調査の翻訳「広東西沙群島誌」では、冒頭に置かれた訳者解説の最初の文に「西沙即七洲洋、西人名伯辣些路」とある。海域の実態を知らず西欧文献を主要な情報源とする中国人のなかに七洲洋＝パラセル諸島という誤解が広まっていたのかもしれない。少し時代は下るが、1925年に『史地学報』第3巻第5期に掲載された李長傳「誌西沙群島」は、「西沙群島（略）西圖作 Paracel Islands and Reefs（略）或称七洲（Ts'ichow or Seven islets(sic) 見夏之時中國坤輿詳誌）」と記している。夏之時『中國坤輿詳誌』は、Louis Richards の *Comprehensive*

*geography of the Chinese Empire and dependencies* (1908年英訳、フランス語版は1905年刊) のことであり、西沙群島(パラセル諸島)を七洲と称するとこの著者が述べる根拠がフランス人宣教師の著した地理書であることが知られる。

2、清仏戦争後、1887年にフランス・清国間の清国・トンキン国境画定に関する条約が結ばれたが、それに関連して出された中・仏ベトナム境界決定継続協議特別条項(中法統議界専條五款)の第三款が、海上の島々の帰属について、東経108度3分の線より以東を中国領、以西をベトナム領とすると規定した。この結果、上の記事で話題となっている九頭山はベトナム領とされ、1890年の「広東越南第一図界約」でも確認されている[浦野 1997: 254-258, 305]。この規定は、1930年代前半にフランスと中華民国の間でパラセルの帰属に関する紛争が開始された際に、トンキン湾だけでなく南シナ海一帯に適用されるとして中華民国側の領土主張の根拠の一つとされた[Samuels 2005: ch4. The Delegation des Paracels]。中華民国の主張は明らかに拡大解釈であり、この解釈に従うとベトナム中部(フエからビントゥアン省にかけて)沿岸の島々も中国領となってしまうので非現実的である。

上の記事で明らかな通り、1880年代に清国が問題としていたのは、防城沿岸の大洲・小洲・老鼠山・九頭山などの帰属であって、それを越えるものではなかったであろう。なお、九頭山を含むこれらの島々は、条約の規定にも関わらず『廣東輿地全圖』『欽州直隸州図』に明確に記されている。

3、『廣東輿地全圖』『広東全省経緯度図』は画期的な地図である。おそらく実際のパラセル諸島を中国において初めて比較的正確に描いたものである。西欧の地図よりは1世紀、西欧の地図を模した幕末日本の地図から半世紀遅れている。

19世紀以前においては、既に述べたとおり、中国では『海國聞見録』『四海総図』系の不正確な曖昧模糊とした地図が主流であった。ただし、ある程度実際のパラセル諸島に近付いた描写をしたものがないわけではない。魏源『海國圖志』道光27年[1847]60巻本巻2:14a(影印本[台北:成文出版社、民國56年])には「万里長沙」「千里石塘」を描いた古臭いタイプの「東南洋各国沿革図」しか載せられていないが、咸豊2年(1852)の100巻本巻3:4a,26b-27a(早稲田大学古典籍総合データベース)にはこれに加えて、新しいタイプの「東南洋沿海各国図」が載せられている。中国に関する地図ではなく東南アジア方面を描いた地図であり、パラセルと思しき島はそもそも中国の領土とはみなされていない。この地図では、実際のパラセルの位置に大・中・小の三つの島が描かれ、大きな島に「萬州礁他島」と記されている。この地図情報の出所は不明である。位置は正確であるが、その描き方は現実とはまだかなりの乖離がある。それでも中国の地図史上でみれば、大分実際のパラセル諸島に近付いているとは言えようか。

4、これまで触れる機会がなかったが、中国の地図で南シナ海の領土を描いた最も古い地図

として、広輿図が挙げられることがある[Samuels 2005: ch.2 The Sea of Seven Islands]。広輿図は、14世紀の朱子本の「輿地図」をもとに16世紀中葉に羅洪先が製作した地図集である。朱子本図は残っていない。かつ、南シナ海を描いた「東南海夷図」は、朱子本図には含まれず、李沢民の「声教広被図」の一部を用いて付加したものであることが明らかにされている[海野 2010: 84-85,132]。中国地図集の附録として追加されたものであり、そもそも中国の領土を描いたものではない。また、その描き方を見ても、海上の島々として諸国が描かれる中に小さく「長沙」「石塘」が描かれているだけの不正確なものである。海上領土の帰属問題とは全く無縁のものである。

浦野起央.1997.『南海諸島国際紛争史：研究・資料・年表』東京：刀水書房.

海野一隆.2010.『地図文化史上の広輿図』東京：東洋文庫.

Samuels, M.S. 2005(1982). *Contest for the South China Sea*. London&New York: Routledge(Kindle).